

數百年の古を懷想せんか、彼の神采勇武、不世出の英主が、此の骨騰神駿の龍馬に跨り、飛箭交刃の間を奔馳するの狀、自から眼前に活躍するを覺ゆるなむべし。

## 三味線の傳來

津田 左右吉

三味線が琉球から來たといふは普通の説であるが、これには多少疑を容るべき餘地があると思ふ。

琉球に何時から三絃が行はれたか、よくわからぬ。通常、中山傳信録を引用するが、これは徐葆光が康熙五十九年(1720)に琉球へいつた時の見聞録で、日本に三絃の行ははじめたといふ永祿(1689)時代より百五十年も後のものである。白石の南島志にも三線、三絃の名が出てをるが、著作の時代は傳信録とほぼ同じである。又たこれより約四十年前、天和二年(1683)に將軍家の前で琉球人の演奏した樂

曲に三線歌といふのがある(徳川實記)。日本や支那の方の記録で、それより古いものがあるかどうか、自分には知らぬ。琉球に於ても確實なる傳説が無いらしい(音樂第二卷第二號、東恩納寛)。(停氏、琉球の歌謡及び音樂)。しかし、傳信録の著者が琉球の三絃を支那のと比較して、長さがすこし短いといつて居るところを見ると、兩方とも大した違ひのないものであること、従つて其れが支那傳來のものであることが想像せられる。既に支那傳來のものであるとすれば、それが康熙以前、即ち明代から傳はつてゐたと考へるに差支なく、少し時代が早すぎるやうではあるが、我が永祿頃にも無かつたといはれぬ。さすれば其の時分、薩摩を通して幾分か交通のあつた日本へ、それが傳はつたとしても、強ち不思議とはいひかねる。

けれども、こゝに疑はしいのは、第一、古傳説の多くが堺の盲法師中小路が傳へたとか、石村檢校が琉球へ渡つてもつて來たとかいふ類であつて、傳來

の媒介地として薩摩の名が一向出ないことである。たゞ嬉遊笑覧に引いてある、神田定宣が淺草船遊の記といふものに三絃は琉球から薩摩に渡つたといふ記事が見える。けれども、それには薩摩からどうして上方へ傳はつたかゞ述べて無いところを見ると、これは由來のある傳説では無く、琉球から来たといふ話から何となしに薩摩としてしまつたのかと思はれる。それとなければ、他の傳説に薩摩の關係したことが見えぬといふ筈がない。又た、薩摩人がはやく三味線を弄んだといふ話も聞かぬ。かういふ風に三味線の傳來について薩摩が關係したらしい證據のないのは、琉球傳來説の根拠を薄弱にするものである。それから第二には、琉球傳來説を載せてある糸竹初心集(寛文四年)、色道大鑑(延寶六年)、大ぬさ(貞享二年)、松の葉(元禄十六年)等は、何れも永祿以後百年以上を経た時代のものであつて、且つ渡來の徑路に關する傳説が區々であり、又た事實らしからぬ分子が

混交してゐて、頗る信用し難い性質のものである。尤もこれらは檢校の家のいひ傳へなどをしるしたものであらうから、琉球傳來といふことは、それが文字にしろされたよりも前からの傳説ではあらう。けれども、其の傳説の起源を永祿の頃まで溯らせることができるかどうかは問題である。といふのは、樂器の傳來と、三絃樂の成立とは同時のこととなく、本手組などか作曲せられたのは早くも慶長(1614)頃らしく、樂器の傳來よりは三十年も後のことであつて、而も其の本手組が檢校派の手になつた三絃曲の祖といはれて居るからである。檢校の何人かが琉球から直接に樂曲を傳へたので無い限り、三絃傳來の始の頃は、幾分か音曲に心得のあるものが、何となしに小唄に合せて弾き試みたもので、後になつて某々檢校等が其れを整頓し、調子や、手を定めたのが所謂組物であると考へるのが自然の推測である。従て檢校の家の傳説は組歌の起源に關しては信すべ

きものであらうが、樂器の傳來に就いては左程重を置くべきもので無い。こゝまで論じて來ると、樂曲の上に於て琉球の三線曲と日本の三絃樂との關係を考へねばならぬことになるが、日本の三絃曲が本來民謡(小唄)から成り立つてゐるものであること、又た同じ小唄が一節切などにも合せたことなどを見ると、樂器は外來のものであるに拘はらず、樂曲は純然たる日本の産物とすべきものであらうと思ふ。

從て此の點は三絃の傳來が琉球からであるか否かには關係がない。但し本手組の第一に琉球組といふ名があるので、それが何か琉球樂に關係があるらしく聞えるが、自分は此の名が甚だ怪しいものだと考へる。それは、組物の名が、鳥組とか、腰組とか、皆な其の組に入つてゐる小唄の語から取つたものであるのに、琉球組ばかりが唯一つ、さうでないのは變である。もし三絃が琉球から來た故であるとか、又は三絃曲の調子か、節か、手か、何かを琉球曲から

取つた故であるとすれば、それは組物全體の事であつて、此の一組のみのことでは無いから、此の一組のみを特にさう名づける理由が無いのである。組物の小唄さへも時によつて多少の出入があつたのであるから、組の名の如きは便宜上呼びならはしたものに過ぎない。琉球組といふ様な意味ありげな名稱は恐くは後人のさかしらに附けたものであらう。

以上の考究は必しも三絃の琉球傳來説を否定する丈けの明な證據とはならぬが、少くもそれを疑ふべき材料とはなる。序にいふが、サミセンといふ語が、サンセン(三線)の轉訛であることは、早く墨水鎖夏録や、近代世事談にも出てをり、近代の學者は大抵之に一致して居つて、蛇皮線から來たといふ俗説の信ずべからざることは明であるが、蛇皮線といふ名、其のものが、古いものには見えてをらぬ。糸竹初心集、色道大鑑、大ぬさ、松の葉などは勿論、江戸節根元記、竹豊故事の如き、やゝ後世のものにも

も蛇皮線といふ名は無い、又た琉球でも古く蛇皮線といつたことを聞かぬ。のみならず、蛇皮線といふ名が本来意味を爲さぬ語である。蛇皮で胴を張るけれども、其の蛇皮に線(絃の意味としか思へぬが)といふ語を付け加へるのは何のことだらう。甚だ譯のわからぬ造語であつて、どう考へても自然に出來た稱呼では無い。それは却て日本のサミセンから轉訛し、もしくはそれを學んだ語で、無理に蛇皮線の文字をあてはめたものであらう。徳川時代になつてから琉球でしきりに日本の歌曲などを學ぶ様になつたといふ事であるから。サミセンの稱呼も日本から琉球に傳はつたとするに不都合は無い様に思ふ。(樂器其のものゝ製法も近世のは日本の三味線を摸擬したものの様に考へられる)。

三絃が琉球から來たか否かはなほ攻究を要する問題であるが、それが支那系統のものであることは確實であらう。律呂正義(皇朝文献通考所引)に、三絃

方槽圓角、冒以蛇皮、木柄、下曲貫槽中、上直與槽面平、槽邊長六寸四分八厘、闊六寸零六分八毫、面長與邊長等、闊五寸三分九厘、厚二寸六分九厘六毫、柄長二尺九寸一分六厘、……柄末出槽外、覆之以木、如道冠形、穿直孔以貫絃扣、匙頭長四寸三分二厘、上闊二寸零二厘二毫、下闊一寸五分三厘、剝其下半爲槽、以設絃軸、槽長二寸零二厘二毫、闊三分八厘四毫、軸長四寸零四厘五毫、槽面中正設柱以承絃、……通體紫檀、山口及軸用象牙、柱用竹、……とあるが、これは殆ど日本の三味線と同性質のものである(律呂正義は康熙御製といふのであるから時代は後れてゐるが、こゝにのせてある三絃は矢張り明代の證書に見える三絃と同じものとせねばなるまい)。琉球の三絃も之と同一系統のものであらうが、日本へも、或は直接に支那から來たのでは無からうか。戰國時代には支那のものが傳來する機會は甚だ多い。三絃をはじめて彈き出したといふ中小路が、當時の貿易

灌であつた堺の人だと傳へられて居るのも此の消息を暗示するものではなからうが。もし果して支那から直接に傳來したとすれば、何故に琉球説が起つたかといふ疑問が起るが、これは傳來の事實が忘れられた徳川時代になつて、時々來朝する琉球人が三絃を携へてゐるのを見て思ひついた臆説ではあるまいか。證據の無い事ではあるが、許容せらるべき推測ではあると思ふ。

なほ序に一言云うて置きたいことは、大槻如電氏の Babee 説であるが、これには賛成することができぬ。Babee と三味線とは樂器の形體及製法が全く違ふ。Babee は寧ろ琵琶に近いもので胴は扁平であつみが無く、すべて木製である。それから棹といふべき部分が無く頸のところは胴から連続して自然に細くなつて居る様に見える。之に反し、三味線は胴が厚く、面に皮を張る、又た長い棹があつて、胴にし込んである。此の三味線と同一系統に屬するもの

が近く支那にある以上、さうして支那と日本及琉球との間に直接の交通があつた以上、三味線が Babee から來たとするのは不合理であらう。大槻氏の説は Babee が胡弓になつて、胡弓が三味線になつたとするのらしいが、胡弓が胡琴、奚琴、提琴などと同じ支那系統に屬するものたることは争はれない。其の製法(胡弓は日本へ來てから胴の形や絃の數に變化が)が Babee と全く性質を異にしてゐることは三絃の場合と同じである。又た胡弓から三味線が出たとするのも根據のないことで、支那に於て三絃と胡琴などが並び行はれたことを思へば、兩方ともに支那方面より輸入せられたと見る方が穩當である。特に記録の上では胡弓の行はれた方が三味線よりは餘程多くて見える。氏の説は糸竹初心集などによつてラヘイカを Babee と見たのであらうが、ラヘイカといふ語は或は Babee かも知れぬけれども、若しさうであるとすれば當時日本に來てゐた外人が胡弓を見て Babee に

似てゐるとも云つた語が傳へ傳はつて胡弓をラヘイカといふ様になつたのであらう。

(四四年一月一日六日)

## 遼東發見の古代土器

濱田耕作

考古學上土器の最も重要な資料なることは、今更吾人の言を須わすして明かなる所なるが、希臘羅馬の「古代土器の歴史」を著せるフルタース氏は、文明發展の附屬物として、最も簡單に而かも必然的なものの中、土器は其の最も普遍的なるもの、一なりとし、一民族の最舊最粗の遺物とし云へば、食物を調理し、飲料を貯ふる甕の形式を取ると普通なりと云ひ、土器が凡ての古代文明の遺物として、多量に發見せらるゝは、其理由とする所、一は其の材料の比較的消滅せざること、二は貴金屬の裝飾物、大理石青銅の彫像或は繪畫の如く、之を奪掠潰落し

て他に利用すること能はざるに本づくもの多しとなせり、尙ほ氏は粘土の性質の裝飾工に容易にして、且つ之を得易さを理由として、一民族の有する美術的機能が最も早く土器に於いて表現せらるゝを常とするものなりと述べたるは、土器の考古學上に於ける價值を論ずるものとして頗る聞可き言と云ふ可く、(Walters; History of Ancient Pottery, vol. I.)

埃及考古學の泰斗フリンダース・ペトリス氏亦だ土器の形式性狀の多様にして、其の變化の急激なること、其の遺存の饒多なることは、研究資料として尤も肝要なるものなるを云ひ、土器を以て各國に於ける考古學の基礎 (Essential Alphabet of Archaeology) を形成するものなりとなせる、蓋し其の價值の重要を切言せるものに外ならず。(Flinders Petrie; Method and Aims in Archaeology)

遼東半島に於ける介墓甄墓石棺等各種の墳墓より發見せらる後漢乃至六朝初期の遺物に關しては、既